

街かど gallery



そんななか第55回八女文化祭総合美術展へ出品した作品（福岡城下之橋御門）が思いも掛けず八女市長賞を頂いた時は、私に水彩画を勧めてくれた親友Y君が自分のことのように喜んでくれました。これは御指導を頂いた田代喜玖生先生のおかげだと心より感謝しております。まだまだ拙い絵ですが温もりのある絵を描けたらいいなと思っております。

など全く思いもしませんでした。また描くチャンスも殆んどありませんでした。田代喜玖生先生御指導の絵画教室へ入会しました。絵を描くのは数十年の永いブランクがあり少々不安でした。真新しい絵具・絵筆そして画用紙を手にしたときはなんだか一年生になったような新鮮な気分でした。毎月2回の絵画教室ではマイペースで一步一步回を重ね、徐々に絵も増えていきました。



八女市本町
後藤 弘司

水彩画を始めたのは親友Y君の親身の勧めによるものでした。それまで絵画とは美術館や美術展で鑑賞するものと思っていきましたから絵を描こう

主に精神障害を持つ方が様々な作業を通して、社会生活になじむための訓練を行い、習慣を身につける場所である八女作業所では、2年ほど前か

めのオリジナルのアレンジです。健康状態の確認や作業マニアルのチェック、体操などじっくり30分かけて朝礼を行い、みんな元気いっぱいです。



活力朝礼

ら活力朝礼に取り組みます。「職場の教養」を輪読した後に身近な事例に置き換えながら、職員が利用者の方に分かりやすく解説をします。社会性を身につけるた

れぞれの持ち場に就きます。のぼり旗作成・椎茸袋詰め・清掃施設外就労、地域との交流を深めるためにイベントやバザーにも参加します。厳しさと優しさと楽しさを大切にしながら日々作業に取り組みんでいます。ぜひ一度見学にお越しください。

社会福祉法人 ハイジ福祉会 八女作業所
八女市本村425-80
電話0943-23-1747

活力朝礼を取り入れたい方は、筑後倫理法人会事務局0942-42-2815迄

矢部川と千間土居 ②

千間土居は昼夜兼行の突貫工事で造られた

大々的な治水工事に当たったのが柳川藩の普請

役（建築や土木工事責任者）の田尻惣助（たじりそうすけ、惣馬そうまの親子で、5〜8m位の土手を築き、上木にクスノキを下層にマタケやハチク・モウソウチク等の竹との二段林の植栽によって堤防の決壊を防ぐ大工事で、しかも対岸の久留米藩からの苦情や抗議の余裕も与えないように昼夜兼行の突貫工事で一三〇〇間（二三〇〇m）の護岸を数日で築き上げていた。また、同区間には堤防から川の中央に突出した石積や蛇籠（じゃこ）で流水をやわらげる刎（は）を造り堤防

を守った。この時、築堤工事に駆り出された地元領民には食事、用便以外には休息の時間もない非常に過酷な重労働であったために田尻惣馬に対する恨みをはらすために「切る時は、木六、竹八、葦九月（何れも陰暦）、惣馬の首は今が切り時」と大変物騒な内容であるが直訴でできない当時、戯言として鬱憤をはらした歌とも言われている。

とは言い、この田尻惣馬は大変に仕事熱心で、築堤工事に当たって洪水で渦巻く激流の中を半切（はんぎり）に乗り、堤防の強弱や流れの緩急等を細かく調査するなど、後世、九州普請役の三傑（鍋島藩の成富兵衛、細川藩の堀平左衛門）と言われるほどの人物であった。この工事によって大雨毎に荒田となっていた田畑が見事に美田として蘇り、地区の人々はこの築堤を「千間土居」や「惣馬が土居」と呼び、今は千間土居公園として旧立



矢部川の流れを変えた刎

花町では昭和56年にクスノキを町の木に指定するなど保健保安林として親しまれ、一方、河川工学の関係では「狐林」と言っつて全国的に有名な水害防備林となっている。



歯科健診
*歯科矯正相談
*口腔がん検診
*口臭測定・相談
*歯磨き指導
*フッ素塗布
*指模型

25年度歯の衛生週間
歯の健康フェア
日時 6月2日（日）
10時30分〜12時30分
会場 サザンクス筑後
先着300名にお土産プレゼント
八女筑後歯科医師会
0943-24-4829

故郷の風景

呟き

人格を否定された時、懐かしい故郷の風景に会いたくなった。春には筑後川土手の黄色い菜の花、白い大根の花。ひばりの声、高い空。子どもの頃に寝ころがった草の匂いが嗅ぎたくて、思わずヒールを脱いで寝ころがった。安らぐ匂い。埋もれていると、私を丸ごと受け入れてくれている大地を感じた。

人は自分の存在が誰かの役に立っていることで生きる喜びを感じたりする。けれど、自分が誰かのストレスになる存在だとしたら、生きていることが辛い。それが大切な人だったらなおのこと。

消えてしまいたい……。そう思った時に会いたくなったのはこの風景だった。私の人格のほとんどは、この故郷で形成された。何を見て嬉しいと感じるか、何を見て悲しいと感じるか、何を許せないと思うのか……。その感性は、この風景の中で大人へと育つうちにつくられた。幼い頃、叱られて閉じ込められた納屋も、学校に行かないと泣いた庭も、腕白に木登りをした梅の木も、全部私を知っていた。どんな性格の私であろうと、じっと私の成長を見守り受け止めてくれていた。

あれから数年、5月……。ちっとも成長していない私、人間失格の私、それでも相変わらず庭には燃えるようなつつじが精一杯花を開いてみせてくれていた。

私はまた、このつつじに背中を押されて、いつもの生活、日常の街へと見送られた。ここに、こんなちっぽけな自分を何十年も変わらず受け止めてくれている場所がある、それだけでいいのだと思いながら……。 森 志穂

老々介護 No.9 新しいおうちはどこに・・・

今日は子ども（と云っても昨年古希の長男から今年還暦の末弟まで二男二女（四人の総年齢359歳まさに高齢社会の縮図です。）たち全員が集まって、この春目出度く96歳になった母の今後について重大な話し合いの日です。さしもしっかりしていた母も厳しい冬を越す間にずい分老いが進みました。耳は数年前から遠くなっていました。足、腰の衰えに加えて認知の症状が顕著になってきました。今まで同居の長男夫婦が老々介護を実践してきましたが二人とも病院通いで家を空けることが多くなりました。早晩「高齢化介護人にも介護人」が必要となりそうです。そもそも築百年近い日本住宅は人生60年を前提に建築されており、当時は90歳を越して暮らすという発想がなかったのでしょうか。当人にとっては重たい課題の話し合いというのにあっさりと結論が出ました。「介護付有料老人施設」がよからうということです。「年とったら安全、安心に暮らせる所がよい」という至極もったもんな理由です。「介護士の学費出させて親看ぬ娘」4人の子たち一人として、次は自分の所で看取るという者はいません。「遺産分け母を受け取る人がない」のが現実のようです。次は本人にどう説明して納得してもらうかです。ここは娘二人の役割です。早速自室のコタツでうたた寝をしている母の所へ行きます。（はるお）

文中の川柳3句はいずれも「サラ川」傑作選すぐろく（講談社）より